

巻頭言

「彼岸を過ぎて咲く朝顔」

理事長 新谷友良

我が家のベランダで朝顔が彼岸を過ぎてても咲き誇っています。環境問題を取り上げた映画「不都合な真実」が日本で公開されたのは2007年。それから12年、9月にはニューヨークで小泉進次郎環境大臣も出席して国連気候行動サミットが開催されました。会議では、スウェーデンの16歳の環境活動家グレタ・トゥンベリさんが「もし我々を失望させる道を選べば、絶対に許さない」と演説しましたが、各国代表には響くところが少なかったという評価を聞きます。それでも、北極で氷山が崩壊し、「プラスチックストローが鼻に刺さったウミガメ」の映像がテレビで流れ、来年4月にはすべての小売店でのレジ袋が有料化されるなど、環境問題、特にプラスチックごみの問題が日常生活のいろいろなところで議論になってきています。

「プラスチックが分解されて出来たマイクロプラスチックが食物連鎖を通じて私たちの体内にも蓄積している。」といわれると、少しビビるところがありますが、「世界では年間約800万トンものプラスチックが、ごみとして海に流れ込んでいる」とか「2050年には、海にいる魚すべての重量よりプラスチックの方が重くなる」といわれても、なかなかピンときません。

「日本で900万トン以上排出されているプラスチックごみの80%以上は何らかの形で有効利用されている」といわれます。有効利用とはリサイクルのことと思ってしまうのですが、そのうちの半分以上は、リサイクルではなく1回限りの焼却熱の利用です。また、150万トンは中国やインドネシアなどに輸出されて、それらの国では有効に再利用されずに海に放出されています。汚れたプラスチックトレーやキャップ付きペットボトルがそのままではリサイクルに回らないことに私たちの理解や想像力は十分に及びません。

私たちは、自分のやりたいことの原因付けに「みんなもいいといっている」とか、やりたくないことをやらない言い訳に「みんなもやっていない」と考えがちです。しかし、そのような私たちのいい加減さを咎めても、プラスチックは溜まっていきます。リサイクル費用を売価に含めるデポジット制や、ラベルを剥がさなくても再利用できるペットボトルの開発など、怠け者が暮らしていることを前提にした仕組みを考えることが急がれます。それまでは、師走に朝顔が咲くことのないように、洗い流したプラスチックのゴミ出しを励行する毎日です。